

【特集】

新・地銀経営論

足利銀行の破綻処理をきっかけとして、地銀経営の今後の方向性に注目が集まっている。疲弊が目立つ地域経済の再生に向けたどのような役割を果たすべきなのか、リレーションシップバンキング・市場型間接金融といった新しい経営課題をどのように実現していくべきなのか。歴史的視点もふまえた新・地銀経営論。

地域トップバンクこそ 一体再生へ頭を使い、汗を流せ

伝統的貸出への偏重ではなく金融技術の活用を

足利銀行の破綻処理は地域金融機関の問題がもはやこれ以上先送りできなくなってきた。現実と、金融監督官庁の問題解決能力の限界を浮き彫りにさせた。また、同時に、今後の地域金融システムにおいては、地域のトップバンクのあり方がきわめて重要な論点になることも明らかとなった。地域トップバンクはこれまで、地域との深いつながりを強みとしてきたが、地域経済が疲弊するなか、それがかえって桎梏となりがねなくなってきた。しかし、彼らに地域を捨てるといふ選択肢はなく、地域と一蓮托生にならざるをえない。そうである以上、地域再生の企画本部となり、実行部隊の一翼を担っていくことが自らを救う道となる。その際にはあわせて金融機能の多様化と近代的なコーポレートガバナンスの確立を実現していかなければならない。

慶応大学 経済学部

教授 池尾 和人



先送りのツケが三号措置
につながつた足利銀

今後の地域金融システムある

いは地域金融機関経営をどう考
えていくべきなのかとのテーマ
を考えるにあたり、この問題が

注目されるきっかけとなった足

利銀行の破綻処理について、あ
らためて評価してみたい。

足利銀の破綻処理では、この
間、後回しにされてきた地域金

融機関の問題がこれ以上棚上げ
はできなくなったことと、カッ

コ付きではあるが一応大手行の
問題に多少の前進がみられたの

九〇年代以降の金融経済問題を どう読み解くか

一つの金融レジームの終焉とその後

財務省 内藤 純一



筆者は昨年七月まで名古屋大学教官としての立場にあつたが、その間に関心を持ち続けてきたことは、九〇年代に入つてからの日本の経済と金融が、なぜかくも長期にわたり不振を続けているのか、である。

結論から先にいえば、その主因は、多くのエコノミストが論ずるようなマクロ政策のタイミングの遅れや不十分さ、あるいは、金融行政の対応の誤算にあるという以上に、端的にいって、一九三〇年代に成立した競争制限と参入抑止、監督重視をその内容とする金融のレジーム（金融に関する制度や規制、政策や行政の理念などを包括した、一つの時代の「体制」を意味する広義の概念。筆者はこれを一九三〇年代モデルと呼ぶ）

が、金融自由化の最終的帰結として崩壊したことにあると考えている。つまり、それは、金融分野に自己責任原則を徹底させることによつて生まれた結果だといいかえてもよい。このような大変化は、レジームという用語から容易に想像がつくように、数十年に一回起こるかどうかの経済事象である。この点を、以下、説明したい。

なお、この論考は、拙稿「2003」「金融の一九三〇年代モデルの終焉と二一世紀型システムへの展望」（財務総合政策研究所ディスカッション・ペーパー）や〇三年度日本金融学会秋季大会・共通論題「日本の金融再生プログラム」への筆者作成ペーパーをふまえてつづき再整理したものである。